

庚申講とは

庚申講は、日本の民俗行事である。

中国の道教によれば、人の身体には頭、内臓、下半身に一匹ずつ、三匹の蟲（三尸＝サンシー）が棲んでいるという。



この蟲どもは腹痛、頭痛などの原因となるたちの悪いものなのだが、それだけでなく、60日に一度巡ってくる庚申の日の夜には人の身体を出て天に昇り、その宿主の悪い行いを天帝に告げ口しに行く。

人の寿命を司るといわれる天帝は、三尸の告げ口を聞き、その罪状の度合いに応じて宿主の寿命を減らしてしまう。

これを防ぐため、庚申の日の夜に一晩中起きていて、三尸が身体から出て行かないよう見張っていよう、ということで行なわれるのが庚申講である。

庚申講は奈良時代に中国より伝えられ、平安時代の貴族の間で盛んに行なわれた。江戸時代には仏教、神道などと結びつき、民衆の間にも流行した。

現在も、当時の隆盛を物語る庚申塚、庚申塔などの記念碑が全国各地に残っている。

東京庚申堂は、庚申講を実践し、復興を目指す団体です。

東京庚申堂

東京都墨田区向島 3-7-4

www.koshiindo.com